

6.1 哺乳類



(1) 県内の哺乳類の概要

富山県内生息種は7目15科37属44種で、絶滅種1目3科3種を加えた種数は全日本産陸生在来種7目24科62属115種の40.8%となる。また、日本産の在来陸生哺乳類のうち51種が固有種で、そのうち24種が、富山県内で確認されている。

県内で確認されている外来種は7種（ノイヌ、ノネコ、ハクビシン、ドブネズミ、クマネズミ、ハツカネズミ、アライグマ）である。ただし、在来種の中にはアカギツネのように人為的に一部の個体を他県から導入したことがある種や、アブラコウモリのように史前帰化動物の可能性のある種が含まれている。外来種のうち、アライグマについては氷見市で複数回確認されており、水辺環境を生息地として好み、両生類や爬虫類などの小動物を採食することから水生の絶滅危惧種への影響も懸念される。そのため、個体数や生息域を減少させる取り組みが必要である。また、ニホンイタチとの競合が心配されるシベリアイタチは、現在のところ県内では確認されていないが、近隣では長野県および岐阜県、福井県で報告されている。今後、富山県内にも分布を拡大する可能性があり、注意が必要である。

富山県の地形は、3,000m級の高山帯から奥山、丘陵、平野、海岸等があり、その中を大小さまざまな河川や用水が流れる。そこには、現在も里地里山の生活を営む集落が点在している。これらの複雑な地形と豊富な水資源が多様な環境を支え、豊かな哺乳類相を育んでいる。森林面積率も高く、多くの種が森林に生息しており、絶滅のおそれのある多くの種は奥山域を主たる分布地としている。近年では、ツキノワグマやイノシシ、カモシカ、ニホンジカなど大型哺乳類は個体数が増加傾向にあると考えられる中、イノシシおよびニホンジカはこの十年に1,700m以上の亜高山帯から高山帯における確認事例が散見される。

また、少子高齢化などに代表される人の生活様式の変化に伴い、中山間地を中心とした里地里山では、ツキノワグマやニホンジカ、イノシシ、ニホンザルなどの中・大型動物において、人との軋轢（農作物被害や人身被害、交通事故など）が増加傾向にあり社会課題となっている。さらに、2019年以降富山県内でイノシシへの感染が継続している豚熱についても、野生下の生息数や産業動物（養豚業）への影響も懸念されることから留意が必要である。今後これらの種と人が共存していくためには、より一層の被害防止策に取り組むとともに継続的な調査による生息実態の把握と生息環境の保全が必須である。

(2) 選定評価の方法

絶滅の恐れのある哺乳類について、各種の生息現状について客観的評価をするためには、個体数と分布域について過去から現在まで、継続的に捉えることが求められる。しかし、本県の哺乳類においては農作物被害や人身被害のあるニホンザルやツキノワグマ、イノシシ、ニホンジカなど一部の種を除き、個体数はもとより、分布域に関する情報さえ不足している。今回の選定においては、2012年以降の記録を中心とした過去の文献、標本、野外調査に基づく生息情報をとりまとめ、過去に実施された第一次、第二次レッドリストと比較し評価を実施した。また、環境省が公表しているレッドリスト2020および近隣の県のレッドリストや生息情報も参考にした。

(3) 選定種の概要

評価の結果、〈絶滅＋野生絶滅〉3種、〈絶滅危惧Ⅰ類〉1種、〈絶滅危惧Ⅱ類〉4種、〈準絶滅危惧〉6種、〈情報不足〉4種とした。カヤネズミは2024年に調査を実施したが、過去の生息地で現在生息が確認できなかったことから、準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅰ類に変更した。平地から山地にかけての樹林地の限られた場所で確認されているのみであり、生息地が限られているコテングコウモリは準絶滅危惧種から絶滅危惧Ⅱ類に変更した。テングコウモリはコテングコウモリと類似した生態をもつと考えられ、コテングコウモリに比して確認事例が少なく生息状況に留意が必要であり、複数カ所で記録があるため、コテングコウモリと同等の絶滅危惧Ⅱ類とした。森林限界より高山域に生息し、記録のほとんどないアズミトガリネズミや、過去に県内での確認例が単独個体で数例しかないクビワコウモリ、ヤマコウモリ、モリアブラコウモリについては判断材料がなく情報不足とした。ヒナコウモリについては近年県内での確認例が増加し、全国的にも広く生息が確認されているためリストから除外した。本州の沿岸地に広く生息していたと考えられ、坂下(1955)の報告で氷見市に漂流した記録のあるニホンアシカについては、環境省レッドデータ2020では絶滅危惧ⅠA類(CR)、IUCN RED LISTでは絶滅(EX)であることから絶滅＋野生絶滅に追加した。

(4) 絶滅の危機に追い込んでいる要因(減少要因)

オコジョやアズミトガリネズミなどが生息する高山帯および亜高山帯では、温暖化などの気候変動に加え、イノシシ、ニホンジカ、ニホンザルなどの大型哺乳類が侵入し定着していくことで、高山帯特有の生態系に壊滅的な影響を与えることが懸念される。ニホンモモンガやヤマネ、多くの翼手目が生息場所としている奥山域の森林では、開発や森林伐採、土砂の流出などが生活を脅かす要因となる。カワネズミの生息する溪流では、大規模な堰堤の設置や護岸工事、周辺環境の開発により生活環境の劣化や生息域の分断などが危惧される。カヤネズミの主たる繁殖場所となるイネ科植物の優占する草地では、耕作放棄地の拡大に伴い人の手が入らず、つる植物などが侵入し、繁殖用の巣をつくることができなくなっている。

(5) 種のリストの整理基準

日本産の在来陸生哺乳類は、絶滅種を含めて7目24科62属115種とされる。このうち、第二次レッドリストの選定種を中心に、県内産のすべての在来種を検討の対象とした。種の和名と学名(分類)は、川田ら(2021)に準拠した。

(6) 謝辞・協力者

今回の選定にあたり、南部久男氏、横畑泰志氏にご協力いただいた。また、カヤネズミの生息調査では、鎌形由紀氏および鈴木浩司氏、中村美華子氏、森大輔氏、勇崎清怜氏にご協力いただいた。瀬戸美穂氏には写真を提供していただいた。ここに記してお礼を申し上げる。

(文責：村井仁志)

オオカミ (食肉目・イヌ科)

Canis lupus

富山県 2025 カテゴリー：絶滅＋野生絶滅
環境省 2020 カテゴリー：絶滅

選定理由

かつて、県内に生息していた記録があるものの、50 年以上生息記録は得られていない。

形態

亜種ニホンオオカミは頭胴長 95～114cm、尾長 27～40cm。四肢と耳が短い。前腕下部前面に暗色の縦斑があること、頭骨は聴胞が低いことなどが特徴。

国内の分布状況

北海道にはエゾオオカミが、本州以南にはニホンオオカミの 2 亜種が広く分布していた。

県内の分布状況

1800 年代後半（明治前期頃）まで生息していたものと考えられる。藩政時代は人々に最も恐れられた生き物で、藩内各地（射水郡だけを見ても本江、本田、宮袋、黒河、布目、生源寺、上牧野、上野、仲瀬原、中野、円池新、西広上、中川、水戸田、大門、津幡江、串田、羽広の各村や高岡油町、木町、古御城、小杉新町など）の人里に現れ、人身被害の記録も多い。

生態・生息環境

主に群れでシカやイノシシを捕食していたと思われる。高次捕食者であるため、生息密度は低く、広大な生息域をもっていたと考えられる。

生存への脅威（減少の要因）

人畜危害防止のための駆除で個体数が減少したことや獲物となる動物の減少、ジステンバーなどの伝染病の蔓延により、明治になって急減、絶滅した。

特記事項

1905 年（明治 38 年）に奈良県吉野村で捕獲された若い雄の個体が最後とされる。剥製標本は、国内では国立科学博物館に 2 点と東京大学に 1 点、和歌山大学に 1 点の合計 4 点、海外ではライデン博物館 1 点が所蔵されている。

（文責：村井 仁志）

ニホンアシカ (食肉目・アシカ科)

Zalophus japonicus

富山県 2025 カテゴリー：絶滅＋野生絶滅
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧 IA 類

選定理由

かつて県内での記録があるが、過去 50 年以上生息記録は得られていない。

形態

オス成獣は平均体長 240cm、平均体重 494kg、メス成獣は体長 180cm、体重 120kg 程度。オス成獣は全身暗褐色で、頭頂部が著しく隆起し、頭頂の毛は白変する。

国内の分布状況

第二次世界大戦以降に記録があるのはカムチャツカ半島南端、千島列島のシヤスコタン島、サハリン南部のモネロン島、北海道の礼文島沖、青森県の久六島、島根県の西ノ島と竹島など、ごくわずかである。1970 年代の生息記録は礼文島沖と竹島だけで 1975 年以降の生息は確認されていない。

県内の分布状況

坂下（1955）により、年月日は不詳であるが氷見に漂流した記録がある。

生態・生息環境

距岸 20km 以内の沿岸域に生息し、岩礁や小島を上陸場としていた。繁殖期は 5～7 月。竹島では繁殖のため 4～5 月に来集し、7 月後半から 8 月に離散した。集団で一夫多妻型の繁殖を行い、1 産 1 仔だったとされる。繁殖を終えると回遊あるいは季節移動をしていたと考えられている。沿岸域で魚類や頭足類を捕食していたと推定されるが、生活史の多くは不明である。

生存への脅威（減少の要因）

長い間禁漁であった沿岸の生息地は、明治初期の政治的混乱の中で捕獲や駆除が放置され、19 世紀末までにほぼ消滅したと考えられている。

特記事項

近年は発見がなく絶滅したとする著作が多いが、国内で 50 年以内の生存情報が礼文島などにあり、現在は絶滅種には該当しない。

（文責：村井 仁志）

ニホンカワウソ (食肉目・イタチ科)

Lutra nippon

富山県 2025 カテゴリー：絶滅＋野生絶滅
環境省 2020 カテゴリー：絶滅

選定理由

かつては県内で生息していた記録があるが、50 年以上生息記録は得られていない。

形態

背中が黒褐色、腹面は淡褐色。頭は扁平で、耳介は小さく端が丸い。首は頭と同じ太さで長い胴に続いている。尾は横に扁平で、基部が太く胴との境は明瞭でない。手足は短く指の間にみずかきがある。頭胴長 55～58cm、尾長 35～56cm、体重 4.2～11.5kg。オスはメスよりも大きい。

国内の分布状況

北海道から九州まで各地の河川に普通に生息していたが、1920 年代から 1950 年代には、兵庫、和歌山、京都、長野、愛媛、香川などの府県の河川や海岸での記録があるが減少した。瀬戸内では 1964 年頃、愛媛の宇和海では 1973 年頃を境にみられなくなった。近年まで高知県新荘川から足摺岬にかけてごく少数が生息しているとされていたが、生息を 30 年以上確認できていないことから環境省は 2012 年に「絶滅種」に指定した。

県内の分布状況

明治期には富山市内にも生息していたという。大正末期から昭和初期にかけて激減し続け、1959（昭和 35）年の朝日町三峰地内のため池で捕獲された記録を最後に絶滅したようである。

生態・生息環境

河川の中下流域から沿岸部に生息する。採餌は水中、陸上で行い、魚類、甲殻類、野ネズミなどを食べる肉食性。川岸などに穴を掘り育仔する。

生存への脅威（減少の要因）

絶滅に至った原因は、毛皮を目的とした狩猟と河川など水辺環境の開発や水質汚染などによる生息環境の減少および餌資源である魚類や甲殻類の減少と毛皮用の捕獲と考えられる。

特記事項

国指定特別天然記念物。ユーラシアカワウソ *Lutra lutra* の亜種とする説もある。2017 年に長崎県対馬においてカワウソの生息が確認されたが、詳細な調査の結果、韓国から散発的にユーラシアカワウソが対馬に分散したものと推察された。

毛皮が水をはじき保温性にすぐれているため、県内では下新川郡を中心に捕獲したカワウソから毛皮を生産していた。1889 年をピークにその数は激減している。このことから、富山県における減少要因は毛皮目的の乱獲であると考えられている（安藤, 2008）。

（文責：村井 仁志）

カヤネズミ (齧歯目・ネズミ科)

Micromys minutus

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅰ類
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

2003 年以降の生息記録を得られていない。また、里地の過疎化に伴い生息環境が減少している。

形態

頭胴長約 54～79mm、尾長約 47～91mm。尾率は 110% 余の尾の長い国内最小のネズミ。体重 7～14g。背面は褐色、腹面は白色の二色性。

国内の分布状況

本州、四国、九州に分布する。日本海側では山形県以南、太平洋側では福島県以南に分布する。

県内の分布状況

2000 年に神通河畔で巣が確認され、2003 年に小矢部市論田で幼獣と巣の記録がある。論田の生息地では断続的に調査を行っているが、その後生息は確認されていない。

生態・生息環境

低地から山地にかけて草地、水田、河川敷などのイネ科およびカヤツリグサ科の植物が密生し、水気の多い所に生息する。イネ科の植物の葉で球形の巣を草上に作る。主にオヒシバやエノコログサなどイネ科植物の種子や、バッタやイナゴなどの昆虫を食べて暮らしている。

生存への脅威（減少の要因）

里地で繁殖場所となるイネ科植物が優占する草地では、耕作放棄地の拡大に伴い人の手が入らず、クズなどのつる植物やその他の丈の高い草本などが侵入し、繁殖用の巣をつくることができなくなっている。また、河川改修などにより草地環境が変わり、生息・繁殖の圧迫要因となる。

保全対策

耕作放棄地およびその周辺の管理が必要である。また、河川敷や護岸の工作物の改変には、植生変化のないよう配慮が必要である。

（文責：村井 仁志）



撮影：富山市ファミリーパーク



カワネズミ (真無盲腸目・トガリネズミ科)

Chimarrogale platycephalus

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

県内では、山地の溪流環境に生息するが、河川改修などで生息環境が減少しているため。

形態

頭胴長 111～141mm、尾長 82～117mm、後足長 23～29mm、体重 25～63g。指趾の側面に扁平で硬い剛毛があり、水かきの役割をする。全身が密な体毛でおおわれており、水中では体毛間に気泡がたまり、空気の層が出来る。背面は夏場に黒褐色、冬毛で灰色が強くなる。全身に先端が銀色の刺毛があり、臀部では多くなる。腹面の体毛は淡褐色で、先端は褐色。

国内の分布状況

本州、九州の山地に生息する。四国、房総半島、牡鹿半島などにはいない。

県内の分布状況

上市町大沢、立山町美女平、富山市有峰、砺波市庄川町、南砺市利賀、南砺市小谷川、南砺市（旧城端町）など県内の山地にある溪流で生息記録がある。

生態・生息環境

山地にある、倒木や岩が多い溪流周辺に生息する。水中を自在に泳ぐ遊泳能力を持つ。半水生適応。個体ごとに縄張りを形成し、岸にある乾燥した石の隙間や、地中に枯葉を集めて巣を作る。ヤマメ等の魚類や水生昆虫、ヒル、サワガニ、カワナナなどを食べる肉食性。主に 2～6 月に 1～6 頭の幼獣を産む。

生存への脅威（減少の要因）

河川改修やダム・砂防堰堤設置による生息環境の減少、農薬や除草剤の水質汚染による餌資源の減少。

保全対策

生息河川における溪流環境の維持と管理。

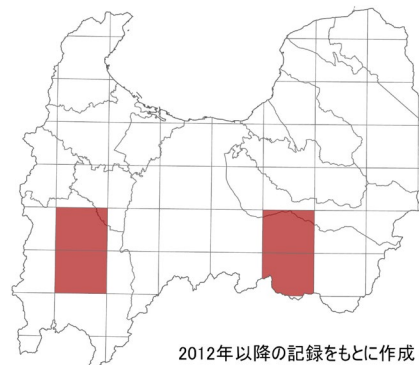
特記事項

日本固有種。水中では体毛の間に気泡がたまり、この空気の層が光を反射して銀色に光るように見えるため銀鼠と呼ばれることがある。

(文責：清水 海渡)



撮影：清水 海渡



2012年以降の記録をもとに作成

テングコウモリ (翼手目・ヒナコウモリ科)

Murina hilgendorfi

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

県内の山地から高山地までの樹林地で記録があるが、限られた場所で、単独で隧道内に休息しているものが観察されているのみであり、生息地が限られるため。

形態

前腕長 41～46mm、頭胴長 59～73mm、尾長 36～47mm、体重 9～15g。体色は灰褐色で、背中には刺毛があり銀色の金属光沢をもつ。管状の鼻孔をもつ。

国内の分布状況

北海道、本州、四国、九州。

県内の分布状況

上市町早月川、片貝川、富山市有峰の有峰湖周辺地域、富山市大山町・長棟・八尾折折、朝日町大平で生息が確認されている。いずれも各地域の冬季歩道、隧道内で単独で休息しているものが確認された記録のみ。

生態・生息環境

県内の平地から山地にかけての樹林地に生息すると考えられている。一般的には森林性コウモリで、森林で採餌を行い、樹木の樹皮下などが主な場所と考えられているが、自然洞窟、隧道などで見つかることも多く、県内の記録は隧道で休息している個体のみが確認されている。繁殖期は初夏で、1産1仔と考えられている。冬眠すると考えられているが、冬眠する時期や場所はよくわかっていない。

生存への脅威（減少の要因）

生息環境である樹林の消失、工事等による自然洞窟や隧道の消失。

保全対策

樹林地の保全、コウモリ用隧道等の設置。

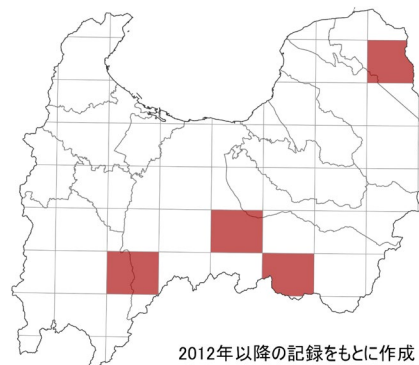
特記事項

天狗の鼻のような管状の鼻孔が名前の由来になっている。

(文責：清水 海渡)



撮影：清水 海渡



2012年以降の記録をもとに作成

コテングコウモリ (翼手目・ヒナコウモリ科)

Murina ussuriensis

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

県内の平地から山地にかけての樹林地で見つかったが、限られた場所
で確認されているのみであり、生息地が限られているため。

形態

前腕長 29～33mm、頭胴長 41～54mm、尾長 26～33mm、体重 3.5～6.5g。
体色は黄茶褐色で、背中には刺毛があり金色の金属光沢をもつ。管状の鼻孔
をもつ。

国内の分布状況

北海道、本州、四国、九州。

県内の分布状況

富山市婦中町吉住、富山市粟巣野・八尾町・山田若土・牛岳周辺・有峰の立
山カルデラ内、有峰湖周辺地域、立山町芦峯寺、黒部市黒部峡谷および
嘉例沢、南砺市利賀地域で記録がある。清水（2022）によって有峰湖周辺
地域ではその年生まれの幼獣も複数回確認されており、該当地域では比較
的安定的に生息していると考えられている。

生態・生息環境

県内の平地から山地にかけての樹林地に生息する。森林性コウモリで、森林
で採餌を行い、樹木の樹皮下などを主な場所とする。秋季は枯葉の中を時にする
こともある。繁殖期は初夏で、1産1仔と考えられている。冬眠すると考
えられているが、冬眠する時期や場所はよくわかっていない。

生存への脅威（減少の要因）

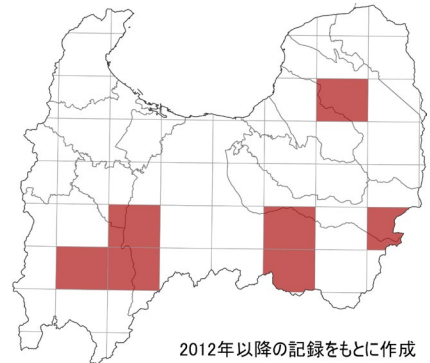
生息環境である樹林の消失。

保全対策

生息地である樹林地の保全、コウモリ用隧道等の設置。



撮影：清水 海渡



2012年以降の記録をもとに作成

（文責：清水 海渡）

ノレンコウモリ (翼手目・ヒナコウモリ科)

Myotis bombinus

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

県内の山地にある隧道で生息確認されているが、8例の記録しかないため。

形態

前腕長 38～42mm、下腿長 15～20mm、頭胴長 44～52mm、尾長 39～50mm、
体重 6～10g。背側は灰褐色で、腹側は淡色。尾膜の後縁の尾端周辺に縄の
れんのように細毛が列生していてその名の由来となっている。

国内の分布状況

北海道、本州、四国、九州の山地。

県内の分布状況

黒部市黒部峡谷周辺および富山市有峰の常願寺川上流部の隧道で6例の記
録がある。また富山市瀬戸（清水、2020）、朝日町小川の隧道内で最大 44
個体の集団（清水、2021）の記録がある。

生態・生息環境

山地から亜高山にかけての自然林に生息する。森林で採餌を行い、自然洞窟
などを時とする洞窟性コウモリ。繁殖期は初夏で、1産1仔と考えられてい
る。冬眠すると考えられているが、冬眠する時期や場所はよくわかっていな
い。

生存への脅威（減少の要因）

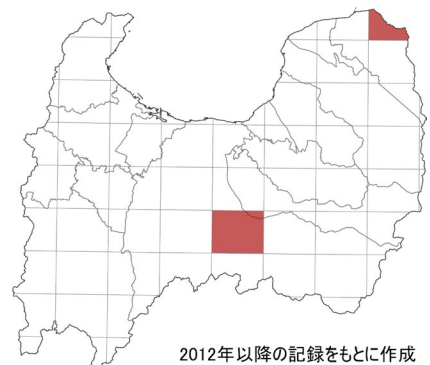
山地にある自然林環境の減少、工事等による自然洞窟や隧道の消失。

保全対策

生息地であるブナ林を中心とした自然林の保全、コウモリ用隧道等の設置。



撮影：清水 海渡



2012年以降の記録をもとに作成

（文責：清水 海渡）

ニホンモモンガ (齧歯目・リス科)

Pteromys momonga

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

分布が局地的で希少な動物。山地帯の環境変化による生息状況の悪化。

形態

頭胴長約 14~20cm、尾長 10~14cm。体重 150~220g。前肢と後肢の間に被膜を有する。尾からは扁平状に体毛が生えている。乳頭は 5 対。大きな目が特徴。

国内の分布状況

本州、四国、九州に分布する。

県内の分布状況

山地帯に広く分布すると思われるが、記録された生息地は、立山（ブナ坂・弥陀ヶ原・立山カルデラ）、富山市有峰、南砺市利賀水無、上平猪谷などに限られる。

生態・生息環境

北方系の夜行性動物。山地から亜高山帯に生息する。天然林以外にもスギの人工林で発見されることもある。樹上生活をし、夜間に木の芽や果実、昆虫などを採餌する。樹洞や木の上に枝を組んだドーム状の巣を造り、ねぐらに利用する。また、春に平均 2 頭と夏に 5 頭の子を出産する。

生存への脅威（減少の要因）

ねぐらとする樹洞や採餌物の豊富な成熟した森林が必要である。森林伐採による行動域の狭小化や分断が懸念される。

保全対策

原生的な森林の保全が必要である。

特記事項

日本固有種。皮膜を使用し樹間を滑空する。



撮影：富山市ファミリーパーク



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：村井 仁志)

ニホンヤマネ (齧歯目・ヤマネ科)

Glirulus japonicus

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

生息している山地から亜高山帯の森林環境の悪化。

形態

頭胴長約 68~84mm、尾長約 44~54mm。体重は夏に 14~20g で冬眠直前は 34~40g になる。ネズミに似るが、背に太い一本の黒条がある。尾は長毛を生じ扁平。

国内の分布状況

本州、四国、九州に分布する。

県内の分布状況

県内の山地帯から亜高山帯の森林に生息するが、高山帯にも現れる。黒部市阿曾原谷周辺、立山町の芦峯寺や美女平、室堂、富山市有峰や大山高杉山、南砺市利賀水無平などでも記録がある。北アルプスの朝日岳から薬師岳まで広く記録がある。

生態・生息環境

夜行性で夜間に果実や小動物を主に採食する。寒冷期に冬眠することで知られる樹洞性動物。自分の体温で残雪に穴をあけ底で眠っていることもある。高山帯の山小屋やホテル、旅館にしばしば侵入し、布団や作業衣のポケットからも見つかる。冬眠から覚醒後、秋までに年 2 回出産する。

生存への脅威（減少の要因）

森林伐採や各種開発により生息環境が劣化し、減少している。利賀水無では、伐採搬出される民有林のブナ樹洞から、巣と 5 頭の幼体が見いだされたことがある。

保全対策

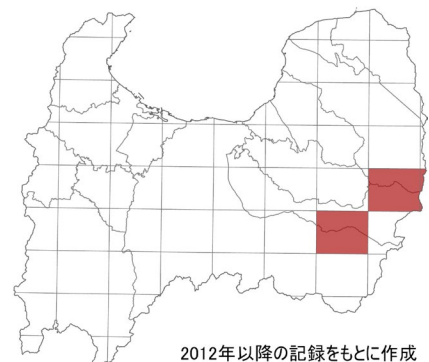
原生的な落葉広葉樹林の保全が望まれる。

特記事項

1 属 1 種の日本固有種。国指定天然記念物。



撮影：村井 仁志



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：村井 仁志)

ミスラモグラ (真無盲腸目・モグラ科)

Oreoscaptor mizura

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：準絶滅危惧

選定理由

県内では、標高 1,000m 以上のブナ林を中心とした土壌が堆積する場所に生息し、生息地が限られるため。

形態

頭胴長 80～106.5mm、尾長 20～26mm、後足長 13～15mm、体重 26～36g。尾は通常後足の 1.5 倍以上の長さがある。手は大きく発達しており、幅と長さがほぼ等しい。爪がまっすぐで強大であることも特徴である。吻上面の裸出部は、長三角形になる。体毛の色は、生息地域もしくは個体によって変異に富んでおり、灰褐色から黒色までである。

国内の分布状況

本州（青森県から広島県の標高 600m 以上にあるブナ林、ミズナラ林といった山地。各分布地は独立していることが多い）。

県内の分布状況

立山室堂から有峰地域周辺に分布記録がある。隣県では岐阜県北部で生息が多く確認され、県境付近で営巣も確認されており、岐阜県飛騨山地と分布が連続していると考えられている。標高約 2,500m の室堂平でも発見例がある。

生態・生息環境

主に山地のブナ林を中心とした自然林の土壌が堆積する場所に生息する。昆虫類、ミミズ類、ジムカデ類、ヒル類などを食べる。地下に広葉樹の葉を使って、径 36cm 前後、高さ 31cm 前後の巣を作る。自らもトンネルを掘るが、他のモグラが掘ったトンネルも利用することもある。主に 3～4 月に 2～4 頭の幼獣を産む。

生存への脅威（減少の要因）

ブナ林など山地の樹林環境の減少。

保全対策

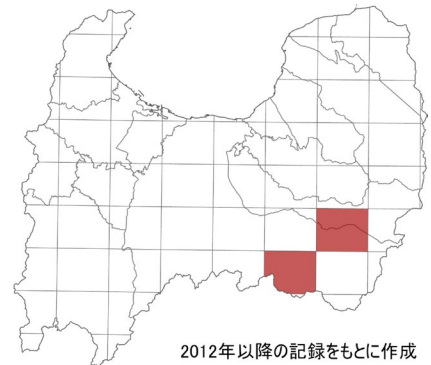
生息地であるブナ林を中心とした樹林地の保全。

特記事項

日本固有種。名前の由来は、日本古来の髪型である角髪（みずら）に由来する。



撮影：清水 海渡



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：清水 海渡)

カグヤコウモリ (翼手目・ヒナコウモリ科)

Myotis frater

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

県内では、標高 1,000m 以上のブナ林を中心とした山地樹林地数か所でのみ生息が確認されており、生息地が限られるため。

形態

前腕長 36～41mm、頭胴長 44～56mm、尾長 38～47mm、体重 5.5～11g。体色は黒褐色。形態がヒメホオヒゲコウモリと非常によく似るが、前腕長が 36mm 以上と大きいこと、下腿と尾の間の皮膜にある下腿動脈の形から種判別が出来る。

国内の分布状況

北海道、本州（岐阜県、石川県以北の樹林地）。

県内の分布状況

富山市有峰の立山カルデラ内と有峰湖周辺地域、朝日町山崎の隧道で記録がある。清水（2022）によって有峰湖周辺地域ではその年生まれの幼獣も複数確認されており、県内の山地樹林地では安定的に生息していると考えられている。

生態・生息環境

主に山地の自然林に生息する。森林性コウモリで、森林で採餌を行い、樹木の樹皮下などを主な場所とする。家屋、自然洞窟、隧道などで見つかることもある。繁殖期は初夏で、1 産 1 仔と考えられている。冬季は冬眠する。

生存への脅威（減少の要因）

ブナ林など山地の樹林地環境の減少、工事等による自然洞窟や隧道の消失。

保全対策

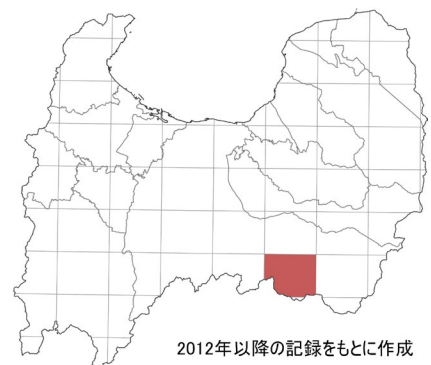
生息地であるブナ林を中心とした樹林地の保全、コウモリ用隧道等の設置。

特記事項

名前の由来は、最初に見つかった個体が竹林で見つかったことからついた。



撮影：清水 海渡



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：清水 海渡)

ヒメホオヒゲコウモリ (翼手目・ヒナコウモリ科)

Myotis ikonnikovi

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧

環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

県内では、標高 1,000m 以上のブナ林を中心とした山地樹林数か所でのみ生息が確認されており、生息地が限られるため。

形態

前腕長 33～35mm、下腿長 12～17.5mm、頭胴長 42～51mm、尾長 31～40mm、体重 4～7g。黒褐色から焦げ茶色の体毛をもつ。背中には刺毛があり不明瞭であるが金色の金属光沢をもつ。皮膜は黒褐色。

国内の分布状況

北海道、本州（青森県から山口県の山地～亜高山帯）。

県内の分布状況

富山市有峰の立山カルデラ内と有峰湖周辺地域に記録がある。清水（2022）によって、有峰湖周辺地域ではその年に生まれた幼獣も複数確認されており、県内の山地樹林では比較的安定して生息していると考えられている。

生態・生息環境

山地から亜高山にかけての自然林に生息する。森林性コウモリで、森林で採餌を行い、樹木の樹皮下などを主な場所とする。家屋、自然洞窟などで見つかることもある。繁殖期は初夏で、1産1仔と考えられている。冬眠すると考えられているが、冬眠する時期や場所はよくわかっていない。

生存への脅威（減少の要因）

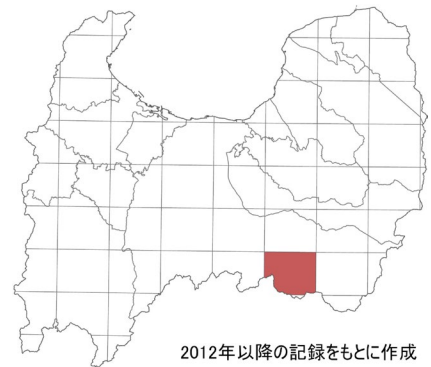
ブナ林など山地にある自然林環境の減少、工事等による自然洞窟や隧道の消失。

保全対策

生息地であるブナ林を中心とした自然林の保全、コウモリ用隧道等の設置。



撮影：清水 海渡



2012年以降の記録をもとに作成

（文責：清水 海渡）

オコジョ (食肉目・イタチ科)

Mustela erminea

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧

環境省 2020 カテゴリー：準絶滅危惧

選定理由

分布が高山および亜高山と局地的で、生息環境の悪化が懸念される。

形態

頭胴長約 16cm（雌）、約 19cm（雄）。尾長 5～6cm。年に 2 回換毛し、夏毛は背面がこげ茶色、腹面は白色、冬毛は白色（尾先のみ通年黒色）。

国内の分布状況

北海道にはエゾオコジョ、本州にはホンドオコジョを産する。本州では石川県以東の高山帯から山地に分布する。

県内の分布状況

夏期は、北アルプスの亜高山帯以上の地域に広く分布する。立山町室堂や千寿ヶ原・弥陀ヶ原・称名滝・剣沢・別山乗越などで確認されている。富山市栗巣野や本宮など標高 500～600m 付近で観察されることがある。冬期には低標高地に漂行する。

生態・生息環境

岩礫地に好んで生息し、地表よりも地下や雪の下の間隙をくぐり移動する。昼夜とも活動し、動作は敏捷。単独で行動することが多い。ネズミ類や鳥類の雛・卵・植物の果実などを食べる。

生存への脅威（減少の要因）

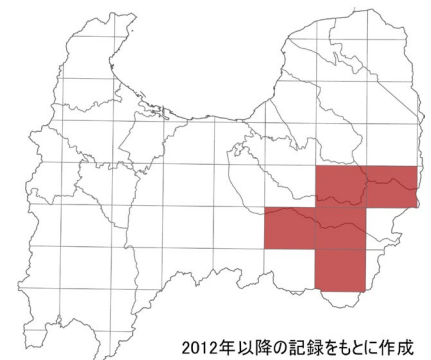
生息地の自然環境の改変が、生息環境の劣化につながる恐れがある。また、気候変動による温暖化による生息環境の変化が及ぼす影響について注視する必要がある。さらに、近年はアカギツネやテン、ニホンジカなど本来高山を生息域としない哺乳類や鳥類の生息が各地の高山で確認されており、餌資源をめぐる競争や生息環境を縮小などの懸念がある。

保全対策

岩場やガレ場など自然環境の保全はもとより、山小屋内で殺鼠剤を食べたネズミを捕食し、二次的な薬物摂取となり絶命した例があるので、山岳地帯における殺鼠剤使用の中止が望まれる。また、温暖化対策や高山帯の環境調査を実施する。



撮影：瀬戸 美穂



2012年以降の記録をもとに作成

（文責：村井 仁志）

アズミトガリネズミ（真無盲腸目・トガリネズミ科）
Sorex hosonoi

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：準絶滅危惧

選定理由

県内の標高 2,500m 以上のハイマツ帯に生息すると考えられているが、県内の記録は非常に少なく近年の分布状況が不明なため。

形態

頭胴長 46～66mm、尾長 47～52mm、後足長 10～12mm、体重 4～5g。体色は背面の体毛は灰褐色から茶褐色。腹面はバフ色で、背面と体側との境界がはっきりしている。

国内の分布状況

本州（石川県、岐阜県、群馬県、埼玉県、静岡県、栃木県、富山県、長野県、山梨県の標高 2,500m 以上の高山）。

県内の分布状況

立山周辺の高山帯（室堂、鏡石平、国見岳）で記録がある。

生態・生息環境

主に亜高山帯針葉樹林から高山帯にかけての森林、草原などに生息すると考えられている。昼夜ともにハイマツの下にある岩石の間やコケ類に覆われた地面の上で活動し、昆虫やクモなどの無脊椎動物を食べると考えられている。1 回に 6 頭の幼獣を産んだ例がある。

生存への脅威（減少の要因）

温暖化などによる高山環境の減少、シカやイノシシといった大型動物の高山帯への侵入による植生変化といった生息環境の減少。

保全対策

高山環境の保全。

特記事項

日本固有種。近年の研究から、頭骨や歯の形態的特徴、遺伝子の解析により、極東ロシアから北海道にかけて分布するチビトガリネズミの近縁種と考えられている。

（文責：清水 海渡）

クビワコウモリ（翼手目・ヒナコウモリ科）
Eptesicus japonensis

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

県内では過去に 4 例の記録があるのみで、生息状況等が不明なため。

形態

前腕長 38～43mm、頭胴長 54～68mm、尾長 35～43mm、体重 8～13g。体色は黒褐色で、背中中の毛色が少し明るく黄褐色気味で、鈍い金属光沢がある。頸部の毛色が黄褐色で輪状に見える。

国内の分布状況

本州（石川県、岐阜県、埼玉県、静岡県、栃木県、富山県、長野県、福島県、山梨県、東京都の山地）。

県内の分布状況

富山市有峰の立山カルデラ内、有峰湖周辺地域、朝日町越道峠での記録があるが、単独個体の確認で、生息状況等は不明。

生態・生息環境

標高 1,000m～1,500m のブナ林を中心とした山地に生息すると考えられている。森林性コウモリで、森林で採餌を行い、樹洞や樹皮の下などを主な場所とすると考えられているが、詳細は不明。長野県乗鞍高原にある木造建築物で、日本国内で唯一繁殖集団が確認されている。初夏に 1 回に 1 匹の幼獣を産むと考えられているが詳細は不明。

生存への脅威（減少の要因）

ブナ林など山地の樹林環境の減少。

保全対策

生息地であるブナ林を中心とした樹林地の保全。

特記事項

日本固有種。1951 年に初めて、1953 年に 2 例目が共に長野県で採集されて以降、1970 年に富士山で採集されるまで採集例がなかった。1989 年に乗鞍高原で繁殖集団が見つかった。

（文責：清水 海渡）

ヤマコウモリ (翼手目・ヒナコウモリ科)
Nyctalus aviator

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

県内で確実な記録は3例、各1個体の記録のみで、生息状況等不明のため。

形態

前腕長 58～65mm、頭胴長 89～113mm、尾長 51～67mm、体重 26～61g。全身が赤褐色の体毛でおおわれており、特に背面の体毛はつやがある。日本国内に生息しているヒナコウモリ科の中では最も大型で、翼開長 400mm にも達することがある。

国内の分布状況

北海道、本州、四国、九州、沖縄。

県内の分布状況

富山市呉羽、富山市有峰、朝日町越道峠で記録がある。いずれも単独個体の捕獲、もしくは拾得された個体。

生態・生息環境

平地から山地の樹林地に生息すると考えられている。森林性コウモリで、森林で採餌を行い、樹洞や樹皮の下などを主な場所とし、特に神社やお寺の社寺林にある大径木、ハルニレやミズナラ、カエデ、ケヤキにあいた樹洞での発見例が多い。道路や新幹線用に設置された高架橋の隙間などでの発見例もある。繁殖期は初夏で、1回に2匹の幼獣を産むことが多い。

生存への脅威（減少の要因）

社寺林などにおける大径木の伐採による場所の減少、エサ場となる樹林環境の減少。

保全対策

社寺林などの大径木の保全、エサ場となる樹林地の保全。

(文責：清水 海渡)

モリアブラコウモリ (翼手目・ヒナコウモリ科)
Pipistrellus endoi

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

県内では富山市有峰で1983年の1個体捕獲記録と2023年の1個体捕獲記録の2回のみであり、生息状況等が不明のため。

形態

前腕長 31～34mm、頭胴長 43～53mm、尾長 34～40mm。体重 5～9g。体毛は背面が濃い橙褐色、腹部が黄褐色。外見はアブラコウモリと酷似しているが、皮膜、体毛のいずれもアブラコウモリより濃色である。アブラコウモリとは上顎犬歯の形態、陰茎骨の形態から判別できる。

国内の分布状況

本州（青森、岩手、宮城、福島、栃木、埼玉、東京、神奈川、新潟、石川、富山、山梨、長野、岐阜、静岡、滋賀、奈良、和歌山、広島、山口）、四国（愛媛、高知）、九州（熊本）。

県内の分布状況

富山市有峰の有峰湖周辺地域で2例記録があるのみ。

生態・生息環境

ブナ林などの天然林を中心に山地の樹林環境に生息していると考えられている。全国ではブナ、スギなどの樹洞で、場所や出産哺育の為にコロニーの形成が観察されているが、県内では記録がなく不明。

生存への脅威（減少の要因）

生息環境である樹林の消失。

保全対策

生息地である樹林地の保全。

特記事項

日本固有種。

(文責：清水 海渡)

＝参考・引用文献＝

- 1) 阿部 永・横畑泰志(編), 1994. 食虫類の自然史. 比婆科学教育振興会. 庄原. 391pp.
- 2) 阿部 永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明(著) 自然環境研究センター(編), 2005. 日本の哺乳類 改訂版. 東海大学出版会. 秦野. 206pp.
- 3) 安藤元一, 2008. ニホンカワウソ. 東京大学出版会. 東京. 233pp.
- 4) 浅利裕伸・木元侑菜, 2018. 奄美大島で捕獲された種不明のコウモリ類. 哺乳類科学, 58(1) : 67–71.
- 5) 大門町教育委員会(編), 1981. 富山県大門町史. 富山県射水郡大門町. 1079pp.
- 6) 出口翔大, 2019. 北陸3県における陸棲哺乳類相の比較. 福井市自然史博物館研究報告, (66) : 51–56.
- 7) 出口翔大・中田 都・鈴木 聡・久米田賢治, 2023. ニホンイタチ *Mustela itatsi* およびチョウセンイタチ *M. sibirica coreana* の尾および顔面の模様の比較. 福井市自然史博物館研究報告, (70) : 97–106.
- 8) Endo H., 1996. Catalogue of Insectivora Specimens. National Science Museum, Tokyo. 174pp.
- 9) Endo H., Tsuchiya K, 2006. A new species of Ryukyu spiny rat, *Tokudaia*(Muridae: Rodentia), from Tokunoshima Island, Japan). Mammal Study, 31 : 47–57.
- 10) 藤重 健・石田寛明・安田 暁・宮本秋津・横畑泰志, 2016. 富山県有峰地域におけるカワネズミの生息調査. 森林野生動物研究会誌, (41) : 33–38.
- 11) 船越公威, 2022. 「もっと知りたい コウモリの世界」の展示を終えてー最新の話: 九州で発見されたコウモリ2種についてー. 鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告, 19 : 1–8.
- 12) 岐阜県環境生活政策課, 2015. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)改訂版ー.
URL : <https://www.pref.gifu.lg.jp/page/4261.html>(2025年6月10日確認).
- 13) 後藤優介・澤田研太・福田 保・西岡 満・永井知佳・間宮寿頼・南部久男・村井仁志・森 大輔・細川美和子・岡 圭一・見浦紗那子・白石俊明, 2015. 富山県における哺乳類の記録(2014年). 富山の生物, (54) : 115–126.
- 14) 畠 佐代子・荘司たか志・山本茂行・村井仁志, 2007. 富山県におけるカヤネズミの繁殖の初記録. 富山の生物, (46) : 65–66.
- 15) 今泉古典, 1964. 奥黒部太郎山の哺乳類. 北アルプスの自然. pp.205–211. 富山大学学術総合調査団, 富山.
- 16) 石田寛明・宮本秋津・藤重 健・安田 暁・横畑泰志, 2016. 富山県有峰地域におけるモグラ科2種の記録. 富山の生物, (55) : 101–103.
- 17) 石川県生活環境部自然環境課, 2020. いしかわレッドデータブック 2020.
URL : https://www.pref.ishikawa.lg.jp/sizen/reddata/rdb2020/documents/02_rdb2020_doubutu_honyurui2_23-39.pdf
(2025年6月10日確認).
- 18) 香川正行・香川智恵, 2007. 福井県嶺北地方におけるチョウセンイタチの初記録. 福井市自然史博物館研究報告, (54) : 103–104.
- 19) 環境省, 2020. 環境省レッドリスト 2020 (哺乳類). URL: <https://www.env.go.jp/content/900515981.pdf> (2025年6月10日確認).
- 20) 川田伸一郎・岩佐真宏・福井 大・新宅勇太・天野雅男・下稲葉さやか・樽 創・姉崎智子・鈴木 聡・押田龍夫・横畑泰志, 2021. 世界哺乳類標準和名リスト 2021 年度版.
URL : <https://www.mammalogy.jp/list/index.html> (2025年6月10日確認).
- 21) 近藤憲久・河合久仁子・村野紀雄, 2011. 北海道札幌市におけるクロオオアブラコウモリ *Hypsugo alaschanicus* (Bobrinskii, 1926) の新たな記録. 哺乳類科学, 51(1) : 39–45.
- 22) コウモリの会(編), 佐野 明, 福井 大(監). 2023. 識別図鑑日本のコウモリ. 文一総合出版. 東京. 239pp.
- 23) 宮本秋津・藤重 健・石田寛明・横畑泰志(著) 日本哺乳類学会 2012 年度大会実行委員会(編), 2012. 有峰地域

における巣箱を用いた樹上性齧歯類3種の生息調査. 日本哺乳類学会 2012 年度大会プログラム・講演要旨. pp.124. 日本哺乳類学会 2012 年度大会事務局. 相模原.

- 24) 本川雅治・下稲葉さやか・鈴木 聡, 2006. 日本産哺乳類の最近の分類体系 -阿部(2005)と Willson & Reeder (2005)の比較-. 哺乳類科学, 46(2): 181-191.
- 25) 向井貴彦・古屋康則・楠田哲士, 2019. 市民等から提供された岐阜県の新たな外来種の侵入記録. 岐阜大学地域科学部研究報告, 4(4): 27-39.
- 26) 村井仁志・白石俊明・間宮寿頼・南部久男・岡 圭一・西岡 満・神保美和子・森 大輔, 2003a. 富山県の哺乳類に関する文献 I. 富山の生物, (42): 39-46.
- 27) 村井仁志・白石俊明・間宮寿頼・南部久男・岡 圭一・西岡 満・神保美和子・森 大輔, 2003b. 富山県における哺乳類の記録(2002 年). 富山の生物, (42): 27-37.
- 28) 村井仁志・西岡 満・白石俊明・神保美和子・森 大輔・南部久男・岡 圭一・間宮寿頼, 2004. 富山県における哺乳類の記録(2003 年). 富山の生物, (43): 1-8.
- 29) 村井仁志・間宮寿頼・南部久男・岡 圭一・西岡 満・白石俊明・見浦沙耶子・細川美和子・森 大輔, 2005. 富山県における哺乳類の記録(2004 年). 富山の生物, (44): 63-72.
- 30) 村井仁志・南部久男・森 大輔・内呂由美子・西岡 満・間宮寿頼・細川美和子・見浦沙耶子・岡 圭一・白石俊明, 2006. 富山県における哺乳類の記録(2005 年). 富山の生物, (45): 29-32.
- 31) 村井仁志・南部久男・後藤優介・森 大輔・西岡 満・内呂由美子・加藤智樹・間宮寿頼・見浦沙耶子・細川美和子・岡 圭一・白石俊明, 2007. 富山県における哺乳類の記録(2006 年). 富山の生物, (46): 15-20.
- 32) 村井仁志・後藤優介・南部久男・白石俊明・間宮寿頼・加藤智樹・細川美和子・見浦沙耶子・森 大輔・西岡 満・岡 圭一, 2008. 富山県における哺乳類の記録(2007 年). 富山の生物, (47): 81-85.
- 33) 村井仁志・南部久男・後藤優介・間宮寿頼・西岡 満・加藤智樹・細川美和子・見浦沙耶子・森 大輔・岡 圭一・白石俊明, 2010. 富山県における哺乳類の記録(2009 年). 富山の生物, (49): 55-62.
- 34) 村井仁志・澤田研太・後藤優介・南部久男・永井知佳・西岡 満・見浦沙耶子・加藤智樹・間宮寿頼・細川美和子・森 大輔・岡 圭一・白石俊明, 2011. 富山県における哺乳類の記録(2010 年). 富山の生物, (50): 103-110.
- 35) 村井仁志・澤田研太・後藤優介・南部久男・永井知佳・西岡 満・加藤智樹・細川美和子・間宮寿頼・見浦沙耶子・森大輔・岡 圭一・白石俊明, 2013. 富山県における哺乳類の記録 (2012 年). 富山の生物, (52): 115-122.
- 36) 村井仁志・後藤優介・南部久男・澤田研太・西岡 満・細川美和子・間宮寿頼・見浦沙耶子・森 大輔・永井知佳・岡 圭一・白石俊明, 2014. 富山県における哺乳類の記録(2013 年). 富山の生物, (53): 117-126.
- 37) 村山美佳・南部久男, 1998. 富山県大山町産ホンドモモンガについて. 富山市科学文化センター研究報告, (21): 127-128.
- 38) 長野県環境部自然保護課, 2015. 長野県版レッドリスト(脊椎動物).
URL: https://www.pref.nagano.lg.jp/shizenhogo/kurashi/shizen/hogo/kisyoyasei/redlist/documents/ch3_1sekitsui.pdf
(2025 年 6 月 10 日確認).
- 39) 南部久男, 1999a. 富山県で絶滅した大型動物(哺乳類・鳥類)の記録 I. 明治・大正時代の富山県における哺乳類の毛皮及び狩猟等の統計. 富山市科学文化センター研究報告, (22): 153-168.
- 40) 南部久男, 1999b. 富山県で絶滅した大型動物(哺乳類・鳥類)の記録 II. ナチュラリストからの報告. 富山市科学文化センター研究報告, (22): 169-176.
- 41) 南部久男, 1999c. 富山県で絶滅した大型動物(哺乳類・鳥類)の記録 III. 博物館資料からの報告. 富山市科学文

化センター研究報告, (22) : 177–181.

- 42) 南部久男・村山美佳・荒木克昌, 1998. 富山県上市産カワネズミについて. 富山の生物, (37) : 51.
- 43) 南部久男・長井真隆, 2012. 富山県東部のカウソの記録. 富山の生物, (51) : 89–91.
- 44) 日本自然保護協会, 2017. 人間の暮らしがつかないできたカヤネズミたちのすみかが消えていく.
URL: <https://www.nacsj.or.jp/2017/07/5557/>(2025 年 6 月 10 日確認).
- 45) 新潟県環境局環境対策課, 2022. 新潟県第 2 次レッドリスト(哺乳類編).
URL: <https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/kankyotaisaku/1356909920533.html>(2025 年 6 月 10 日確認).
- 46) Ohdachi S. D., Ishibashi Y., Iwasa A. M. and Saitoh T. (eds.), 2009. The Wild Mammals in Japan. Shoukadoh Book Sellers. Kyoto. 506pp.
- 47) 坂下栄作, 1955. 富山県動物目録. 自費出版. 192pp.
- 48) Sasaki H., Ohta K., Aoi T., Watanabe S., Hosoda T., Suzuki H., Abe M., Koyasu K., Kobayashi S., Oda S., 2014. Factors affecting the distribution of the Japanese weasel *Mustela itatsi* and the Siberian weasel *M. sibirica* in Japan. Mammal Study, 39(3) : 133–139.
- 49) 清水海渡, 2020. 富山県におけるヒナコウモリの越冬集団の記録. 富山市科学博物館研究報告, (44) : 49–50.
- 50) 清水海渡, 2021. 富山県下新川郡朝日町湯ノ瀬トンネルを利用するコウモリ類の個体数変化(予察). 富山市科学博物館研究報告, (45) : 63–67.
- 51) 清水海渡・霜鳥智也, 2021. 2020 年に有峰湖周辺で確認したコウモリ 3 種の記録(予察). 富山市科学博物館研究報告, (45) : 63–66.
- 52) 清水海渡, 2022. 有峰湖周辺地域の小型哺乳類相. 富山市科学博物館研究報告, (46) : 37–46.
- 53) 清水海渡, 2023. 有峰湖周辺地域で確認したコウモリ類について. 富山市科学博物館研究報告, (47) : 57–60.
- 54) 清水海渡, 2024. 有峰湖周辺地域で確認したコウモリ類(2023). 富山市科学博物館研究報告, (48) : 67–70.
- 55) 白石俊明・澤田研太・南部久男・福田 保・村井仁志・見浦沙耶子・間宮寿頼・須藤一行・後藤優介・西岡 満・岡 圭一・永井知佳・細川美和子・森 大輔, 2016. 富山県における哺乳類の記録(2015 年). 富山の生物, (55) : 105–114.
- 56) 白石俊明・澤田研太・南部久男・岡 圭一・福田 保・見浦沙耶子・間宮寿頼・永井知佳, 2017. 富山県における哺乳類の記録(2016 年). 富山の生物, (56) : 120–128.
- 57) 白石俊明・澤田研太・岡 圭一・南部久男・福田 保・間宮寿頼・見浦沙耶子・亀谷三志, 2018. 富山県における哺乳類の記録(2017 年). 富山の生物, (57) : 122–130.
- 58) 白石俊明・澤田研太・南部久男・西岡 満・福田 保・井出哲哉・岡 圭一・亀谷三志, 2019. 富山県における哺乳類の記録(2018 年). 富山の生物, (58) : 128–134.
- 59) 白石俊明・南部久男・岡 圭一・福田 保・中田達哉・澤田研太・間宮寿頼・西岡 満・井出哲哉・見浦沙耶子・亀谷三志, 2020. 富山県における哺乳類の記録(2019 年). 富山の生物, (59) : 94–102.
- 60) 白石俊明・清水海渡・南部久男・岡 圭一・澤田研太・中田達哉・西岡 満・見浦紗那子・井出哲哉・福田 保・間宮寿頼・亀谷三志, 2021. 富山県における哺乳類の記録(2020 年). 富山の生物, (60) : 99–107.
- 61) 白石俊明・南部久男・岡 圭一・西岡 満・清水海渡・澤田研太・井出哲哉・福田 保・見浦沙耶子・間宮寿頼, 2022. 富山県における哺乳類の記録(2021 年). 富山の生物, (61) : 105–112.
- 62) 白石俊明・南部久男・西岡 満・中田達哉・澤田研太・清水海渡・福田 保・井出哲哉・見浦沙耶子・岡 圭一・間宮寿頼, 2023. 富山県における哺乳類の記録(2022 年). 富山の生物, (62) : 127–132.
- 63) 正印清逸(著) 富山県自然保護協会(編), 1981. 和田川流域の哺乳動物. 有峰の自然. pp.201–220. 北陸電力. 富山.

- 64) 鈴木 聡, 2013. 最近の福井市におけるイタチ類(*Mustela spp.*)の生息記録. 福井市自然史博物館研究報告, (60) : 31-36.
- 65) 立山自然保護センター, 2001-2010. 立山自然保護センター業務報告書. 立山自然保護センター. 立山町.
- 66) 砺波市史編纂委員会(編), 1984. 砺波市史. 国書刊行会. 東京. 1081pp.
- 67) 富山県, 1999. 立山地区動植物種多様性調査報告書. 富山県. 富山. 232pp.
- 68) 富山縣婦負郡役所(編), 1973. 越中婦負郡志. 富山縣婦負郡町村会. 富山. 578pp.
- 69) 富山県自然保護課, 1977. とやまの野生鳥獣. 富山県. 富山. 147pp.
- 70) 富山県自然保護課, 1980. 富山県の鳥獣. 富山県. 富山. 242pp.
- 71) 富山県自然保護課, 2012. 6.2 哺乳類. 富山県の絶滅の恐れのある野生生物—レッドデータブックとやま 2012. pp.19-31 富山県生活環境文化部自然保護課. 富山.
- 72) 富山市ファミリーパーク公社, 2005. ファミリーパーク地内自然環境総合調査報告(2005 年度版). 富山市ファミリーパーク公社. 富山市.
- 73) 富山市ファミリーパーク公社, 2006. ファミリーパーク地内自然環境総合調査報告(2006 年度版). 富山市ファミリーパーク公社. 富山市.
- 74) 植木忠夫, 1964. 立山山系とその周辺地域(TKA 地域)の小哺乳類および有尾両生類. 北アルプスの自然. pp.193-204.富山大学学術総合調査団. 富山.
- 75) 山本茂行, 1996. 有峰の哺乳類. 常願寺川流域(有峰地域)自然環境調査報告. pp.299-307. 富山市科学文化センター. 富山.
- 76) 山本茂行・湯浅純孝(著) 富山県生活環境部自然保護課(編), 1995. 5 動物(1)哺乳類. 立山カルデラ自然環境基礎調査報告書. 富山県. 富山.
- 77) 横畑泰志, 2007. 日本産哺乳類における外来種問題. 日本の科学者, 42 : 172-176.
- 78) 財団法人日本野生生物研究センター, 1987. 過去における鳥獣分布情報調査報告書 第3回調査(昭和 60~61 年度).

URL: <https://www.biodic.go.jp/kiso/99/kakocho.html#a> (2025 年 6 月 10 日確認).